巻　頭　言

現場に学ぶ

生産病研究部長

成田　實
NARITA, Minoru

本所と支所・施設での研究生活を経験した。気候や風土など異なる環境条件の下、何処に行っても畜産業の生産活動をつぶさに勉強することができた。誠に幸いというほかない。北海道（札幌）では大規模酪農、岐阜（関）では養鶏、東北（七戸）では放牧と寒冷地施設型畜産から生じる動物衛生の問題である。これらの問題にどれだけ対応できたかよりも、どれだけ意識し現場に足を踏み入れたかが重要である。地域問題の対応は支所・施設の責務であるが、しばしば全国対応の課題も含まれるため難しい問題が多い。支所・施設では本所に比べ施設・機器、サポート部門等、研究環境に恵まれていないが、与えられた場で最善をつくす皆の姿は素晴らしい。

東北で、ある NOSAI 獣医師の取り組みを知る機会があった。数頭の繁殖和牛を飼育するおじいちゃん・おばあちゃんの農家では微弱な発情兆候をしばしば見逃し、分娩間隔の延長等の繁殖障害が問題となった。大規模畜産農家では、新しい繁殖技術の導入によりこれら問題の解決が試みられている。零細な（生きがいも含む）畜産農家の問題解決に正面から立ち向かった若い臨床獣医師は、地域診療にプライドと責任を持ち、輝いていた。現場の問題を直視し、本質を見抜き、対応を模索し、「なぜこの課題に挑むのか」という問題発掘の必然性の決定が現場研究の醍醐味である。ないないづくしの研究環境から生まれる創意、工夫と努力、研究を支える仲間との一体感が大切である。畜産農家に「行って」、畜主の話を「聴いて」、飼養現場を「見て」、動物に「触って」、関係者に「説明・話す」ことができ、研究者としてのプライドと責任、自己研究領域の拡大と継続、生産獣医療に関与する研究成果に感動する研究者をはぐくむ現場との出会いが支所・施設にある。その結果、支所・施設では、「問題発掘の場」と「与えられた場で最善をつくす」機会が多く提供され、自らの真実を見通す思考力と技術力が試される。本所との違いがここにある。

今回、生産病の問題解決に携わる機会を得た。畜産農家では濃厚飼料の多給や飼養管理の集約化等の拡大・効率主義を進めた結果、生産病・周産期疾病が多発している。そのため、家畜の供用年数は短縮し、生涯生産性や受胎率が低下し、分娩間隔が延長するなどの問題が生じている。生産病の発症には、飼育形態や飼養管理等の要因と宿主の生理的変化が複合的に関連しているため、問題解決には生産者、診療獣医師、畜産関連の研究者や専門家との連携の必要性が自明である。

この四半世紀、科学はいろいろな分野で大きく飛躍した。獣医界においても「先端技術」の掛け声の下、より末梢細分化した専門性の高い研究が推進された。しかし、生産病を含む獣医療・動物衛生の問題の多くは複合的で、個別研究・技術だけではなかなか解決が困難である。問題解決を目指した新たな総合研究・技術開発と他分野との連携を再構築するには、現地からの情報に耳を傾け、敏感に対応するよう「現場に学ぶ」姿勢が今求められている。